

## 青木実さんと本郷・浜田・相良

相良 直彦

本誌 24 号 (42-49 頁、2008) に載った高橋 博氏の『青木 実：インタビューで明らかになったこと』は興味深かった。また、その中で、過去の (偉い?) 人の一人でもあるかのように私にまで言及されているのにはびっくりした。その、本郷次雄先生、浜田 稔先生および私への言及部分、すなわち、「専門家には相手にされていないと感じていた」という見出しのもとでまとめられている青木さんの談話 (同誌 46-47 頁) に関して私の見解や感想を書いておきたい。

### 本郷次雄先生とのこと

(青木さんが) 本郷先生を初めて訪ねたとき、「ここには資料は何もありませんから。文献類は一切ありませんから」と言って何も見せてくれなかったということについて。

先生は自身で購入した文献をいくらか自宅に持っておられたかもしれないが、研究室にめぼしい文献が無かったのは事実だったのではないか。きのこの名前を教えていただくために私はなんども先生を訪ねたが、研究室にたいした文献は無かったように思う。当時、先生は京大農学部植物病理学研究室に通って、文献を筆写していた (今のようなコピー機は無かったし、本が「禁帯出」だったかもしれない)。外国の文献が入手しやすくなったのは後年のことである。自身の勤務先の滋賀大学が文献環境として劣悪であることを強く意識していたことが前記の発言になったと思われる。アマチュアだからと低くみて先生が対応されたということではなかったのではなからうか。

先生は、「青木さんは、自分はアマチュアだ、外国語がわからない、と言うけれど、外国の文献をじつによく勉強してるんですよ」と言っていた。分類を専門としていたゆえに、先生にとって青木さんはむしろ競争者的な存在ですらあったかもしれない。

### 浜田稔先生とのこと

「浜田さんは表面的にはアマチュアに好意的なふりをしすぎるね。そこまでアマチュアのレベルが高くないのに高くとったりね」について。

青木さんと浜田先生との間に具体的にどのような付き合いがあったかは知らない。ところで、先生は「アマプロ論」を書いている (椎茸経済研究所発行、月刊『きのこ』1971 年 12 月号 8-15 頁; 浜田 稔先生定年退官記念事業会発行、浜田 稔『マツタケ日記』1974 に再録)。その中で、「まず菌学者の層を厚くしようではないか」と説いているから、アマチュアと接するに当たってそういう戦略的な考えもあったかもしれない。しかし、それ以前に、先生は人好きであったと私には見える。教育者としてゆとりがあったと言いきかもしれない。「いろいろな人がいるからいいんや」と言っていた。だからこそ、多くの人が先生の周りに集まったし、関西談話会も成功したのだと思う。そして先生は、とくに特志家が好きで、特志家を育てるのが上手かったと私はみている (倉石 衍ほか、「恩師 浜田 稔先生」、日菌報 23: 531-542, 1982)。「篤志家」が本来の文字であるが、その「篤志」は社会貢献の意味にふつつ使われるようなので、ここで

は特志家とする。つまり、誰もやらないこと、誰もやらない人生をやろうとする人、変わり者。要するに、先生は変わり者が好きということであって、それから先の関係は接する人の側の姿勢によるところが大きかったのではないだろうか。

関西菌類談話会発行、『関西菌類談話会 50周年記念誌』(2008)では多方面の人々が先生について語っているので、アマチュアとの関係についても参考になると思う。

### 私とのこと

「浜田さんの次は相良(直彦)さんでしょう。相良さんも同じ系統なんだな。本郷さんとけしかけるようにしてね、僕を持ち上げてね。本郷さんも応援するような格好にしてね。そのやりかたがね、本当に心からやってるんじゃないと。心は案外、アマチュアはだめだとかね、思いながら持ち上げるんだね」について。

私が青木さんと関わるようになったのは研究上の必要からだだった。のちに「アンモニア菌」と称することにした菌類のうち、特にヒトヨタケ類の分類に関して青木さんを頼った。「アマチュアのレベルが高くない」とか「アマチュアはだめ」とか思っていたら、頼りにはしないだろう。青木さんの観察に感服していたからこそ頼ったのであった。そして、自分の分身とも言える学位論文に『日本きのこ図版』(以下、『図版』とする)を引用し(1974)、その論文を公刊もした(Contr. Biol. Lab. Kyoto Univ. 24: 205-276, 1975)。その後の学会誌論文にも『図版』を引用している。良いものは良いのだ。なお、私も「日本きのこ同好会」の会員になっていた。

青木さんと私との関わりの一部はすでに公表されている(日菌報 19: 108, 1978)。交わした文書類はほとんどすべて残っているからそれをひもとけばもっと書くべきことがあるかもしれない。けれども、それをする気には

なれない。いかにも後ろ向きの仕事なのだ。代わりに、印象に残っていることを一つ書こう。『図版』の記念すべき第1000号は、「アンモニア菌」の1種モエギヒメヒトヨタケ(青木新称; 私の論文では“*Coprinus* sp. no. 7”)を扱っている。この号は私への配慮であり、一種の表敬であったと受け止めている。

### 知見の公表をめぐる

さてしかし、「レベルが高くない」「だめ」という青木さん側の受け止めに関して、思い当たるフシはある。それは学界発表をめぐることである。研究したことは発表して誰にでも利用できる形(文献)にしなければ、研究したことにはならない。これがわれわれ(プロ?)の側の論理であり、青木さんに発表を勧めた記憶もある。本郷先生も勧めたと思う。発表へのこだわりにおいて、青木さんとわれわれとの間に差があったことは事実であろう。この差が、青木さんを苦しめたことはありうる。

研究によって得られた知見を学界に発表しないでいると、同業者の邪魔になることもたしかである。同業者側ではその知見を無視するわけにもいかず、引用するわけにもいかず、自他の区別がつけられないのだ。私自身も同業者の邪魔になっているところがあって心苦しい。

青木さんは日本きのこ同好会という場で青木さん流の発表をおこなってはいた。しかし、scienceの世界(学界)ではある決まった手続きを要求される。学界が至上のものだというつもりはないけれども、そこでものを言うためにはそこで作法によらざるをえない。このことは浜田先生の「アマプロ論」でも触れられている。

『図版』を文献として利用可能な最低限のものとするため、故吉見昭一氏の協力を得て、第1~1000号を製本して世界の主要な図書館・研究機関(下記)に贈った。費用は日本

きのご同好会の資金から捻出された。青木さんや日本きのご同好会のために製本・寄贈をおこなったと言うつもりはない。『図版』を引用した私の論文を生かすためにもそうする必要があったのだ。

再びしかし、青木さんのなされたことは深いところで実質的にわれわれ（プロ？）以上に世の中に貢献しているかもしれない。『図版』がひそかに、しかし広く受け入れられている昨今の状況を見てそう思う。またその状況は、「長く生きていて面白いことがある」と思えることの一つでもある。

### 『図版』第1～1000号の寄贈先

『図版』第1～1000号は4分冊に製本し、その第4冊に1～1000号の索引を付けた。送付・寄贈は結果的に二次にわたっておこなわれた。

#### 第一次（1978年）寄贈先

- Commonwealth Mycological Institute, Kew, UK
- Museum National d'Histoire Naturelle, Paris, France
- University of Michigan Herbarium, Ann Arbor, Michigan, USA
- Plant Pathology Herbarium, Cornell University, New York, USA
- 中国科学院微生物研究所図書館、北京市、中国
- 国立国会図書館、東京
- 東京大学附属図書館、東京
- 国立科学博物館自然史研究図書室、東京
- 北海道立林業試験場、美唄
- 日本きのごセンター菌蕈研究所、鳥取

#### 第二次（1984年）寄贈先

- 中国科学院昆明植物研究所、昆明市、中国
- Dr. David Hosford, Central Washington State College, Washington, USA
- Institut for Sporeplanter, København

Universitet, Denmark

- Dr. James M. Trappe, Forest Sciences Laboratory, Oregon, USA
- Dr. Gaston Guzman, Instituto Politecnico National, Mexico
- Farlow Reference Library, Harvard University, USA
- 農林省林業試験場きのご第一研究室、東京
- 農村振興庁農業技術研究所菌・研究科、大韓民国京畿道水原市（・は木偏に耳）

アメリカ菌学会の会誌 Mycologia に Prof. Richard P. Korf (Cornell University) による書評が載ったと聞いたが、私は見ていない。実はこの度の製本・寄贈以前に、イギリスの研究者から青木さんへ接触があった。それを仲介する中で、『図版』が外国人をも感動させることを私は知っていた。外国人には、『図版』は日本の奥行きを感じさせたにちがいない。

#### むすび

一生の大半は「馬鹿にされている」と思いながら暮らす。それが人生というものではないだろうか。

それにしても青木さんの人生はすさまじい。70歳で離婚した勇氣（？）にも感動するし、70歳でこのから足を洗ったいさぎよさにも感心する。足を洗えるには達成感があったからに違いない。当年70歳の私は離婚もきのご離れもできず、綿々と暮らしている。

(2008年11月記)